べし、それによりきたにたゝみしき、うへに御わらうだかさねて、けしきある御脇足をかせ給へり、これたゝの御座なるべし、

〔蜻蛉日記中ノ上〕あはれかくてはてなば、いとくちおしかるべし、あるほどにだにあらず、おもひあらむにたがひても、かたらひつべきをとおもひて、けふそくにをしかゝりてかきけることは、いのちなかるべしとのみのたまへ、略下

〔十訓抄三〕書寫性空上人、生身の普賢を見奉るべき由、寤寐に祈請し給けるに、或夜轉經に疲て、經をにぎりながら、脇息によりかゝりて、しばしまどろみたる夢に、生身の普賢を見奉らんと思はば、神崎遊女の長者を見るべき由して夢さめぬ、

〔吾妻鏡五〕文治元年十月六日乙卯、梶原源太左衛門尉景季、自京都歸參、於御前申云、參向伊豫守源義經亭、申御使由之處、稱違例無對面、仍此密事以使不能傳、歸於旅宿六條小路油相隔一兩日、又令參之時、乍懸脇足被相逢、略下

〔園太暦〕貞和四年十一月廿四日、今日女院宣光門院實子有御落飾事、略中

次御著座　此間所役女房、略註持參次第具、　御帷俎懸御脇足　御脇息略中　次女院向御脇足御座、略下

〔大安寺伽藍緣起并流記資財帳〕

合脇息貳足佛物

〔沙石集二〕佛舍利感得人之事

少納言入道信西申ケルハ、略中木ヲカセノヤウニシタルヲモ助老ト申シテ、老僧ノ坐禪ノ時、苦ケレバ脇ヲカケヤスミ候、大體脇息ノ風情ナリト申ケル、才覺コソメデタケレ、

〔後撰和歌集二十賀〕左大臣の家に、けうそく心ざしをくるとてくはへける、　僧都仁敎

脇息雜載